

令和2年度 奈良市立二名幼稚園 研究実践概要

園長名 野口 和代

全園児数 23 名

1. 研究主題 にこにこ・もりもり・きらきら活動する幼児を目指して
—子どもの心を動かす遊びの工夫—

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

自ら様々な環境に関わり、夢中になって挑戦したり、工夫したりすること、心を動かし試行錯誤しながら、友達と協力するなどの体験を積み重ねることで豊かな心が生まれ、にこにこ・もりもり・きらきら活動する幼児の育成につながると考え研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

様々な環境に自ら関わり、充実感や満足感を味わい意欲的に活動する幼児を育成するため、子どもの気持ちに寄り添い、発達の過程に応じた様々な環境の工夫や援助のあり方を探る。

②研究の重点

- ・昨年度の実践・反省・評価をもとに、研究主題について、職員相互の共通理解を図る。
- ・一人一人の発達をふまえ、遊びの中で幼児が友達と思いを伝え合い、心を動かす豊かな体験をするための環境構成や援助の工夫・保育者の役割を保育者間で探る。

③活動の方法

【4歳児 6月】「ロケットや」

- 遊びの楽しさや面白さを保育者と共有する。

6月、期待と不安を持って幼稚園生活が始まった。前日の共通経験活動で裸足になって泥んこ遊びを経験し、次の日も多くの子もたちが砂場でどろんこ遊びをしている。いつも不安そうにしているA児も自分から裸足になり、砂場につくった池に水を流すことを楽しんでいる。だんだん他児も集まってきて遊びが賑やかになるとA児は「やめる」と保育者に伝えてきた。保育者は「ビーチサンダルが砂で汚れたから洗おうか」と言い、桶まで一緒に行きA児とサンダルを洗っていた。すると、A児の手が滑り、サンダルが手から離れ勢いよく水中から水面へと上っていった。「わあ!」と保育者が驚きの声を上げると、同じく驚いた顔をしていたA児だったが、保育者と目が合うと満面の笑みを浮かべた。今度はわざと水中でサンダルから手を放し、サンダルが浮かぶ様子を観察している。2、3回繰り返した後、小さな声で「ロケットや」とA児。「ほんまやね。ビュンって上がってきたもんね」とA児の発見に共感する。「先生のもなるかな」とA児。「できるかな? どう思う?」「なると思う」「じゃあやってみようか」と、同じようにサンダルを水中に沈ませ手を離すと、勢



いよく水面まで上ってきた。「なった！」「Aくんが言った通りだったね」と、驚きや楽しさを共有し合った。

その後、A児は自分のサンダルに泥で汚れを付け、洗っては浮かべて遊ぶことを何度も繰り返していた。それを見ていたB児も、A児の真似をして同じ遊びを始め、場を共有していた。片付けになるとB児に「またしよう」と声を掛ける姿があった。

<反省・評価>

園生活に不安があり気持ちが安定しなかったA児だったが、偶然の驚きや面白さを共有したことで、保育者と心が通じ合うきっかけとなり夢中になって遊ぶ姿へと変わった。

また、A児は遊びの中でB児に話しかけることはなかったが、自分が発見したことをB児が真似してくれたことが嬉しく、「またしよう」と友達に言うことができた。翌日になると「今日もロケットする」と目的をもって砂場へと行く姿あり、遊びへの意欲が生まれた。

【5歳児 6月】「うさぎ組さんにあげよう」

- 異年齢児の友達と積極的にかかわろうとする。
- 友達と互いに考えや思いを出し合い、遊びを進める。

入園当初、園生活に慣れず泣いている年少児がいた。園庭で遊んでいたA児とB児はしばらく泣いている様子を遠くから見ていたが、2人でこそこそと話すと、園庭に咲いていた花を摘み、年少児に渡しに行った。渡して帰ってきたA児とB児は「ありがとうって言ってくれた」「喜んでくれたで」と嬉しそうに保育者に話していた。保育者はA児とB児が年少児を想う気持ちを十分に認めたいと思い、「よかったね。きつとにじ組さんの優しい気持ちが嬉しかったんじゃないかな」と2人の想いを受け止めた。すると、「他のうさぎ組さんにもあげたら喜ぶかな」「じゃあ、いろんなお花を摘んで、花束にしよう」と話し、他に何がいるかを相談し部屋から麻紐やリボンを準備してきた。そして、バケツを片手に園庭のいろいろな場所から花や草を摘んでいった。A児は「どんな花束にしようかな」と摘んできた花から組み合わせを選んだり、B児は茎の部分を麻紐でくくってまとめたりして、花束をいくつもつくっていった。たくさんできあがった花束を見て、「かわいい！」「じゃあこれうさぎ組さんに渡しに行こう」と、嬉しそうに渡しに行った。年長児になり、年少児にどう関わればよいのか戸惑っている様子だった子ども達が、自分たちから関わろうとした瞬間だった。その様子を他の子ども達にも知ってほしいと思い、話し合いの機会を設けた。A児・B児は花を渡した年少児が喜んでくれたことを話したり、花屋さんを開きたいと話したりし、店屋さん遊びが始まっていった。また、この遊びをきっかけに自分たちから年少児を遊びに誘う姿なども多く見られるようになった。



<反省・評価>

保育者が子ども達の「花束をつくろう」と話しているのを見守り、すぐに取り出せるようにいつも部屋に麻紐やリボンなどを用意しておいたことから、遊びの時間の中で子どもたちは思いを実現させることができた。

また、泣いている年少児を見ると「どうしたのかな」と話したり、隣のクラスをのぞいたりして気にしていたが、どう関わればいいのかわからなかった。そこで保育者は機会を逃さずにA児とB児の年少児を想う気持ちを十分に受け止め、他児に伝える機会を設けた。このことをきっかけに、自分たちから年少児を遊びに誘いかけたり話しかけたりする姿が見られるようになった。

【4歳児11月】「私も焼きたい」

- つくりたい物のイメージをもち、クッキー作りを楽しむ。
- 不思議さや面白さを感じ、自分なりに考えたり試したりしながら遊ぶ。

5歳児の小麦粉遊びに興味をもち、遊びに参加する幼児が増えてきた。遊びの中で小麦粉や水の量、生地のコね方などを教えてもらい、5歳児と同じようにやりたいと4歳児なりに考えたり試したりしている。

A児は家庭で母親とパンや菓子作りをよくしていることもあり小麦粉遊びに喜んで参加していたものの、すぐに満足し遊びを離れる姿があった。この日は「この前お母さんとクッキー作ったの」と母親と作ったクッキー作りを思い出し、小麦粉の生地を「固い」「難しい」と言いながらも諦めずに平らに伸ばしている。イメージ通りに遊べるよう「型抜きあるよ、使う？」と声を掛けた。「欲しい！どれにしようかな」好きなものを選んで型を抜いていく。「見て、これはイルカさん」と満面の笑みで保育者に見せ来るが「今日にはじ組さん居てないから焼けない」と小さな声で呟いた。「じゃあ先生と一緒に焼く？」とA児の思いに寄り添い、一緒にトースターの準備をした。トースターに入れると「ドキドキする」「上手にできるかな」と両手を握り締めながら言うA児。トースターを触らないことだけをしっかりと伝え保育者がある場から離れるが、A児は一人になってもずっと焼ける様子を見続けている。15分後「先生！チンって言ったよ！」慌てた様子で保育者を呼びに来る。「美味しく焼けたかな？」とC児とワクワク感を共有しながらトースターを開ける。「うわあ！美味しそう！」こんがり焼き色が付いたクッキーを見てA児が歓声を上げた。生地に入っていたのか、大きく膨らんだものがいくつかあった。「うわあ！膨らんでる」驚きに声を上げたA児がぼつりと「イルカがアザラシになっちゃった」と言った。A児らしい感性と表現に「まんまるアザラシに見えるね」と共感すると「色も一緒！」と嬉しそうに笑った。「なんでアザラシになっちゃったんだろう。不思議」と言うA児に「面白いね。次はどんなのが出来るんだろう」と、声を掛けた。その後もA児は「小麦粉したい」と自ら進んで小麦粉遊びに取り組むようになり、少しずつ1つの遊びにじっくりと取り組むことができるようになった。遊びの中で友達同士のやりとりが増え、関係が深まってきている。

<反省・評価>

A児の興味関心に沿った遊びを楽しむ中で本児の思いに丁寧に寄り添った。保育者の援助のもと、じっくりと遊びを進めることで思いが実現する嬉しさ、予想外の楽しさなどを存分に味わうことができ満足感を得ることができた。その満足感が達成感となり、次への意欲へとつながった。

【5歳児1月】「氷投げたらな、きれいになるねん」

- 氷の性質に関心をもち、友達と話し合っ、考えたり試したりする。
- 遊びに主体的に取り組む、自分の思っていることを言葉で伝えたり、友達の考えを聞いたりする。

子ども達は氷ができるように、園庭に水を張ったお皿やバケツを用意し、毎朝氷ができることを楽しみにしていた。その日の寒さによって氷のできる厚さ・薄さの違いや、水が凍るとき氷に模様や筋が入ることに気付いたりしていた。また、その氷を使って料理をしたり、いろいろな形の氷ができるおもしろさを楽しんだりして遊んでいた。

ある日、雪を使ってかき氷づくりをしていたが、雪が解けてしまい、かき氷がつかれない。そこで、自分達でつくっている氷を使ってかき氷をつくりたいと考えた。「どうやったら、かき氷で

きるかな」「粉々に割る?」「かき氷って削るよな」「じゃあ石鹸削るやつ、使うのはどう?」と泡遊びで石鹸を削るときに使ったおろし金を思い出して、倉庫から出してきた。早速削り始め、「すべるなあ」「持ちにくくてなかなか削れへん」と苦戦しながらも、根気強く削り続ける。「どうかな」と見てみると削れた氷が解けていた。「あれ?」「水になってる」と自分たちのイメージ通りに氷を削ることはできなかった。「あかん」「なんでやる」と何故うまくいかなかったのか考えたり、その後もナイフで切ろうとしたり、スプーンで割ろうとしたりしていろいろと試している。

別の日、A児が「氷投げたらな、きれいになるねん」と保育者に話しに来た。「投げたらきれいになる?どういうこと?」と聞き返すと、A児は「氷って砂つくやろ。その氷を投げたらな、きれいになるねん」と話し、保育者の前でやって見せた。A児の様子を見ていたまわりの子たちも「おー!」「ほんまや」「なんでかな」と不思議に感じていた。他児も実際にやってみて「投げてる間に風で飛んでいくとか?」「砂のところに投げるより芝生のところに投げる方がきれいになるで」と自分の考えを話していた。すると、B児が「あ!見て!砂!」と、大きい声で呼びかけた。「まわりに土、落ちてるねん」と、投げた氷のまわりに落ちている砂を指して話す。それを見ていた子ども達は、「落ちたときに砂がとれるんや」「たぶん衝撃で」と、自分の意見を出し合っていた。その後も、「氷って水で洗ったらきれいになるけど、投げてもきれいになるねんな」「発見やわ」と子ども同士満足気に話す姿が見られた。

<反省・評価>

今年度は寒い日が続き、氷が毎日のようにできたことから、継続して冬の自然現象に触れて遊ぶことができた。子どもたちはできた氷を使っていろいろな方法を考えたり試したりしながら遊んでいる。疑問に思ったことや気付いたことなどを互いに伝え合い遊びを進めることで、意欲的、主体的に遊ぶ姿につながった。

5. 研究の成果

- 発達段階や幼児の願いを見極め、子どもの心に寄り添った援助をしたことで、思いを表現する楽しさを十分味わうことができた。主体的に活動し、思いをいろいろな形で表現しようとする姿につながった。
- 子どもの気づきやアイデアを見逃さず受け止め、環境構成を再構築していったことで、子ども同士が刺激を受け合い生き生きと活動したり、友達同士で認め合ったりする姿につながった。
- 保育者は子どもの考えや発想に寄り添い、一緒になって考えたり楽しんだりすることが大切である。

6. 今後の課題

- 今後もさらに、子どもたちが生き生きと活動し、表現する楽しさを十分に味わえるように意図的・計画的に環境構成や援助の工夫に努めていきたい。
- 日々の振り返りの中で職員間での共通理解をし、柔軟な発想や視野を広げ、職員の確かな資質向上に向け取り組んでいきたい。